

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：12601

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A））

研究期間：2018～2023

課題番号：18KK0333

研究課題名（和文）近世イギリスにおける大衆出版・法・初期公共圏

研究課題名（英文）Popular print, law and the early public sphere in early modern Britain and Ireland

研究代表者

後藤 はる美（Goto, Harumi）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：00540379

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,000,000円

渡航期間： 12ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、17世紀の大衆出版物に現れる裁判に関する報道に着目して、民衆による法や法廷の認識、および印刷物の制作、流通、消費への関与を検討し、それを通じて民衆の言説空間への参加のありかたを明らかにすることをめざした。これらを通じて、批判的公衆と近代的ジャーナリズムが誕生する啓蒙期以前の、近世的「初期公共圏」の形成過程と特徴を理解することを最終目的とした。2019年度を中心にケンブリッジ大学およびダブリン大学トリニティ・カレッジのトリニティ・ロングルーム・ハブ人文学研究所を拠点に調査を行い、共同研究者の協力のもとで新たな人脈の開拓と学術交流、体系的な史資料の収集を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

王政復古期の教皇主義者陰謀事件の一環で、アイルランドにおけるカトリック反乱計画の嫌疑で大逆罪に問われたプランケット大司教裁判に関する報道と出版を主要な題材に、17世紀の公共圏の性質とそれが人々の法・法廷に対するまなざしにもたらした影響を考察した。同事件は事実無根の反乱計画の情報が印刷物の形で流通し、裁判自体も報道のなかで展開した点と、1640年代に「大虐殺」をもたらしたとされる「アイルランド反乱」の集団的記憶との関連で現実味を帯びた点に特徴がある。同事件の検討をつうじては、革命前夜との構造的な連続性と、世紀後半に至っても出版所の限られるアイルランドのイングランドとの非対称性が浮き彫りにされた。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to consider people's attitudes toward law and law courts in 17th-century Britain and Ireland, with special reference to their representations in popular print. The final goal was to understand people's participation in public discourse during this period and the formation of the burgeoning "early public sphere" before the emergence of critical public and modern journalism. The central part of the research was conducted in the academic year of 2019 during my visiting scholarship at the University of Cambridge and the Trinity Long Room Hub Arts and Humanities Research Institute.

研究分野：イギリス近世史

キーワード：近世 イギリス メディア 法 民衆 公共圏

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

17世紀は、二度の革命（1649年、1688年）と内戦によって国制上の大転換を経験する政治危機の時代である。チャールズ1世の処刑を決めた「国王裁判」や、護国卿政權を樹立した成文法「統治章典」を筆頭に、関連する事件の多くが法廷と法の問題を軸に展開した。共和政期（1649～60年）は法廷記録がラテン語に代わって英語で記された特異な時期でもある。これらの争いは、政府広報、パンフレット、一枚刷りの瓦版など多様な形態の印刷物のなかで盛んに報じられ、エリートから民衆までを巻き込んで展開した。とりわけ、内戦下で検閲制度が崩壊した1641～60年と一時的に検閲法が失効した1679～82年には、出版タイトル数が爆発的に増加した。この結果、当該期に進行したイギリス革命と、名誉革命への導火線となるカトリック王弟ジェームズ〔のちのジェームズ2世〕の王位継承排除危機はともに「ペーパー・ウォー」の側面をもっていた。この二つの政治危機は、ステュアート王朝によるイングランド・スコットランド・アイルランドの「三王国」支配という複合的国家編成と、長い宗教改革の問題の交差のなかで生じたと位置づけられる。

代表研究者・後藤は、博士論文執筆以来、近世イングランドにおける大陪審を切口に、民衆による法執行と政治参加や、複合的国家編成の問題に取り組んできたが、そのなかで、国王処刑直後の1649年に刊行された巡回法廷判事の演説や、排除危機の時代の「アイルランド陰謀事件」の紙上戦にふれる機会があった。アンジェラ・マクシェーン博士による17世紀の政治的バラッド（瓦版的出版物）の体系的カタログでは、これらの出版物において法や法廷は主要なテーマであることが確認できるにもかかわらず、この点にとくに着目した研究はこれまでにない。

## 2. 研究の目的

本課題はこうした問題関心から、1640～50年代（イギリス革命期）と1679～82年（王位継承排除危機期）の大衆出版物の比較分析を通じて、民衆による法や法廷の認識、および印刷物の制作、流通、消費への関与を検討し、それを通じて民衆の言説空間への参加のありかたを明らかにすることをめざした。これらを通じて、批判的公衆と近代的ジャーナリズムが誕生する啓蒙期以前の、近世的「初期公共圏」の形成過程と特徴を理解することを最終目的とした。

## 3. 研究の方法

研究遂行にあたっては、イングランド宗教改革と民衆という観点からアレクサンドラ・ウォルシャム教授（ケンブリッジ大学）、複合的国家編成動揺の鍵となる革命期アイルランドと民衆という観点からジェーン・オーマイヤ教授（ダブリン大学トリニティ・カレッジ）に共同研究者として協力を求めた。

中心となる2019年度はイギリス・ケンブリッジ大学を拠点に約1年間の在外研究を実施し、期間中に計2カ月間ダブリン大学トリニティ・カレッジのトリニティ・ロングルーム・ハブ人文学研究所も訪問して、上記共同研究者の助言のもと、新たな人脈の開拓と体系的な史資料収集に従事した。その後、新型コロナウイルス感染症の流行拡大の関係で海外渡航が制限されたが、2022年夏には3年ぶりに渡欧が実現し、最終的な成果発表に必要な補完的な調査を実施した。

具体的な事例研究としては、王政復古期の「教皇主義者陰謀事件」の一環で、アイルランドにおけるカトリック反乱計画の嫌疑で大逆罪に問われたオリヴァ・ブランケット大司教の裁判に関する報道と出版を題材に選び、これを1640年代の裁判の様相と比較することで17世紀をつうじた公共圏の性質と、それが民衆の政治化や彼らの法・法廷に対するまなざしにもたらした影響を考察した。

研究期間に訪問した主要な文書館・図書館は、英国図書館、ケンブリッジ大学図書館、オクスフォード大学ボドリアン図書館、ダウンサイド大修道院付図書館、ダブリン大学トリニティ・カレッジ図書館、アイルランド国立図書館である。

#### 4. 研究成果

教皇主義者陰謀事件のさなかに起きたオリヴァ・プランケット大司教の裁判にまつわる報道と出版を主要な題材とし、この事例を17世紀前半の革命前夜の様相と比較することで、17世紀をつうじた公共圏の性質とそれが人々の法や法廷に対する態度にもたらした影響を考察した。

同事件は1679～82年の王位継承排除危機下で起きた「教皇主義者陰謀事件」の一環として位置づけられるが、アイルランドでの陰謀企画が問題となった点で特徴的である。とりわけ事実無根の反乱計画の情報が印刷物の形でイングランド/アイルランドで流通し、裁判自体も報道のなかで展開した。また、「プロテスタント大虐殺」をもたらしたとされる「アイルランド反乱」（1641年）の集団的記憶との関連で現実味を帯びた点も特筆される。さらに、プランケット大司教はアイルランドにおける（架空の）行動が大逆罪に問われ、当初はアイルランドの法廷に起訴されたが、のちに不透明な経緯でイングランドの王座裁判所に訴訟が移管され、そこで有罪判決が確定し、タイバーンで処刑が実行された。このことから同事件は、本来は異なる法体系に属するアイルランドとイングランドの法廷の関係や、それとステュアート朝三王国における君主に対する反逆罪（大逆罪）の位置づけ、さらには二王国をまたいだ情報の流通に人々がどのように関与したかを明らかにするうえで稀有な情報をもたらす切口となった。

同事例の検討をつうじては、革命前夜の諸問題との構造的な連続性とともに、世紀後半に至っても出版部数や印刷物の流通が限定されていたアイルランドでは、情報流通をめぐりイングランドとの非対称性が際立っていたことが浮き彫りになった。また、裁判をつうじてプランケットが行った様々な法的主張は、当時はことごとく無視されたものの、印刷物のなかではより長い影響力を持ち続け、大逆罪法（1696年）を含む1690年代の一連の法改正に間接的につながったことも確認できた。これらの成果はダブリン大学トリニティ・カレッジ歴史学部の近世史セミナーにて口頭発表した（2020年2月）、さらにこれをもとに英語論文の公刊を準備している。

そのほか、本研究課題の遂行をつうじて共同研究者のウォルシャム教授、オーマイヤ教授をはじめイギリス、アイルランドの第一線の研究者との親交を深め、今後の学术交流の基礎を築くことができた。とくにオーマイヤ教授には、後藤が企画する国際集会に2度にわたって協力をいただいており、その成果が『東洋大学人間科学総合研究所紀要』および『歴史学研究』に掲載されている。また、新型コロナウイルス感染症の流行拡大の影響で当初予定していたアメリカの諸機関の短期訪問は叶わなかったが、研究期間の延長が認められたことから、2023年1月に東京大学にて開催された国際シンポジウム「革命における公論と暴力」を三谷博教授（東洋文庫）の基盤研究（B）課題との共催にて開催し、イギリス革命期の公共圏の性質をアメリカ、フランス、日本、ロシア、中国、中東における革命との比較において考察する機会を得た。この成果は現在、英語論集への寄稿論文として公開すべく準備中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 ジェーン・オーマイヤ（後藤はる美訳）	4. 巻 1021
2. 論文標題 デジタル史料とパブリック・ヒストリー 1641年反乱の証言録取集（the 1641 Depositions）公開プロジェクト	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 2-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 後藤はる美	4. 巻 1021
2. 論文標題 論争的史料と歴史学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木道也、後藤はる美	4. 巻 22号別冊
2. 論文標題 社会史を再考する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ジョン・ウォルタ（後藤はる美訳）	4. 巻 22号別冊
2. 論文標題 分野の境界を越えて 「新しい社会史」と近世イングランドにおける政治文化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 5-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ジョン・モリル（後藤はる美訳）	4. 巻 22号別冊
2. 論文標題 修正主義と「新しい社会史」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 33-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 マイケル・ブラディック（後藤はる美訳）	4. 巻 22号別冊
2. 論文標題 「新しい社会史」と文化論的転回	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アン・ヒューズ（後藤はる美訳）	4. 巻 22号別冊
2. 論文標題 「喚くふしだらな女たち」 イギリス革命期の女性の行為主体性を概念化する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 135-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ジェーン・オーマイヤ（後藤はる美訳）	4. 巻 22号別冊
2. 論文標題 1641年 新しいコンテキストとパブリックな視角	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 147-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 後藤はる美
2. 発表標題 17世紀イギリスにおける暴力・正当性・公共圏 / Violence, Legitimacy and Public Sphere in Seventeenth-Century Britain and Ireland
3. 学会等名 革命における公論と暴力 / Pen and Sword in Revolutions (東京大学) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 後藤はる美
2. 発表標題 礫岩のような国家と近世的主権 17世紀イギリスの例から (小シンポジウム3「礫岩のような国家に見る「主権」理解の批判的再構築」)
3. 学会等名 日本西洋史学会第71回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 後藤はる美
2. 発表標題 近世イギリスにおける大衆出版と公共圏 17世紀
3. 学会等名 近世イギリス史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Harumi Goto
2. 発表標題 Print, Law and Public Sphere in Early Modern Britain and Ireland: Oliver Plunkett and the Trial by Jury, 1680-81
3. 学会等名 Early Modern History Seminar (Trinity College Dublin) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 後藤はる美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 292
3. 書名 「ブリテン諸島における革命」木畑洋一・安村直己責任編集『岩波講座世界歴史 第15巻 主権国家と革命』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
ウォルシャム アレクサンドラ  (Walsham Alexandra)	ケンブリッジ大学・歴史学部・教授	
オーマイヤ ジェーン  (Ohlmeyer Jane)	ダブリン大学トリニティ・カレッジ・トリニティ・ロング ルーム・ハブ人文学研究所・教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 革命における公論と暴力 体制変革のグローバル比較 / Pen and Sword in Revolutions: A Global Comparison	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 歴史学研究会総合部会例会「デジタル史料とパブリック・ヒストリー」	開催年 2021年～2021年

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	ケンブリッジ大学			
アイルランド	ダブリン大学トリニティ・カレッジ			